



中村忠左衛門と文化織

橋をかけよう でっかい橋を

今治からだよ 尾道へ

瀬戸内海の うず潮こえて

橋をかけよう 天高く

男の夢は 虹よりでかい

昭和四十二年に発売した架橋推進歌「でっかい夢」の二節で、吉田正が作曲し、フランク永井が歌った曲である。

その、「夢の架け橋」が現実のものとなるのに、それから三十年の歳月が経過し、この春（一九九九年五月）に全通した。連日のごとく利用者にぎわい、今治の地を全国区の知名度に押し上げる役割をはたしてくれている。

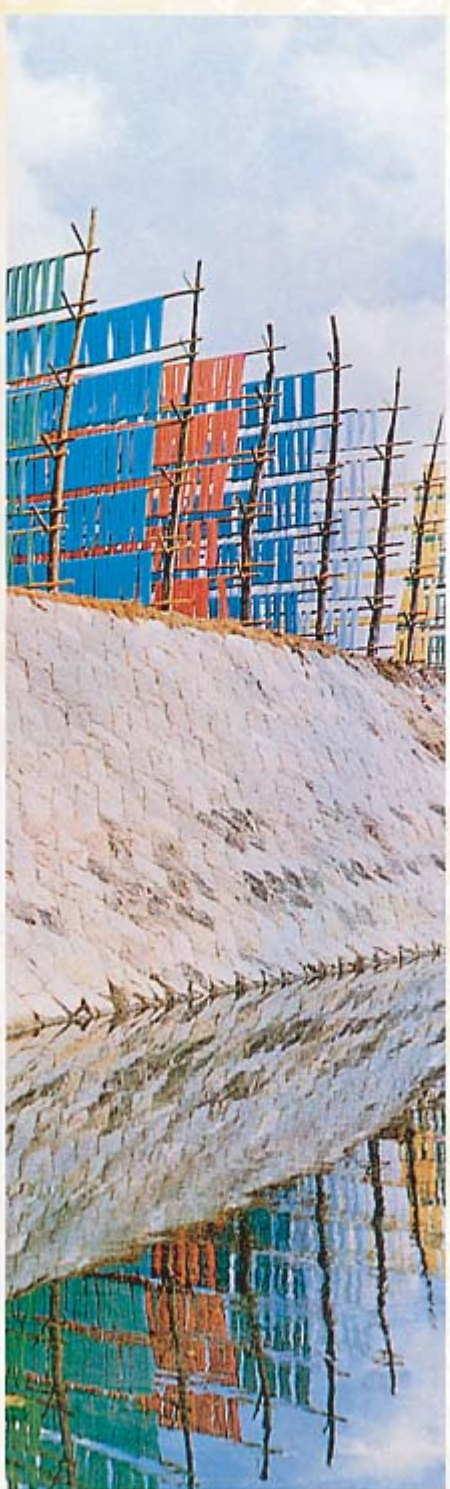
「タオルの町」としてその名を知られていた今治に、もう一つ全国に通用する顔ができたわけで、大変嬉しいことだ。

さて、その「タオルの町」としての今治を今日のごとく日本一といわれるまでに発展させた要因は次の三点ではないだろうか。
(一) 着社川の伏流水という水質の良さに恵まれたこと。(二) 中興にその人を得たこと。(三) 江戸時代以来、綿糸の産地としての基

盤があったこと。などである。
その「中興の祖」として、今治タオルの歴史に名をとどめている人物が、中村忠左衛門その人である。
明治二十七年に、阿部平助によってこの地にタオルの種が播かれ芽がふきかけたのだが、彼の本業だった伊予ネルを産業革命の軌道にのせるため、残念ながら六年後にタオル部門から撤退を余儀なくされたのだった。
そのうち数社が細々と生産を続けていたが、全くもって風前の灯だった。

ところが明治末年頃に麓常三郎なる人物によって「二挺箄ボタン」という製織法が発明され、一挙に今までの二倍の生産が可能となった。そのことが契機になりタオルに転業する業者が急増し、にわかにならタオルは活況を帯びることになる。
そうした折、まさに雲が龍を呼ぶがごとくに登場したのが中村忠左衛門だった。彼はそれまで他産地より格段におくれていた製品改良や技術開発に次々と手をつけ、今治タオルのレベルを一挙に引き上げたのである。

忠左衛門は、明治十五年に今治の別宮で中村市治の五男として生まれた。学卒後に、「備後がすり」の技術を習得するため、今治のすぐ沖合にある島、大島の友浦地区の工場につとめたが、本場の備後産地の織物に押され工場はまもなく閉鎖されてしまった。
そこでやむなく今治に帰り、当時の新興織物だったタオルに目をつけ、それに自分の未来を賭けてみることにした。
早速、自宅の二階に織り機を据え、試織をはじめたのだった。ときに明治四十三年、



忠左衛門二十四才の春である。

それから三年後、たまたま原糸の買いつけで大阪に出張中、船場の店でタオルの先晒（タオルを織る前に原糸を白く晒しておくこと）ものを売っているのを手にした時、彼の脳裏にインスピレーションがひらめいた。

それにヒントを得て、今治に帰ると早速、先晒の糸の一部を色に染め、縞模様（今でいうかすり模様）のタオルを製織し、大阪市場に出したところ絶大な人気を博し、飛

ぶように売れたのだった。当時、タオルは白いものであると思われていただけに、色付き縞タオルの登場は画期的なものだった。
「縞タオル」が爆発的に市場を席捲することにより今治の機屋も伊予めんからの転業者が相つぎ、産地としての生産規模は飛躍的に拡大したのである。
「徹で好奇心が旺盛だった彼の性格が、新興織物であったタオルに向いていたのか、毎日、夜を徹して製品の改良と創意工夫にとりくんだ。

綿布の織り組織からヒントを得て創案した「元禄模様」や「文化織」をつぎつぎと世に送りだし、そのどちらもが業界はじまっていた空の空の売れゆきをしめした。「文化織」はタテ糸の変化によって両端のヘムの部分に渦巻き模様を織りだす特殊な織りで、特許を得た大ヒット商品だった。
「先晒し縞タオル」が忠左衛門の発案で世に出てからわずか五年ほどの間に、今治のタオル生産は二十倍以上に増大し、今日におよぶ日本一のタオル生産地としての基

盤が確立され、中興の祖として彼の名前を不朽のものとしたのである。
彼は昭和二十年に六十四才で寿命をまっとうしたが、彼が生前いつも口にしていた「決して人をだましてはいけない」との遺訓は、子から孫へと脈々として受け継がれ、中村家の家訓としていまも事業経営の中に厳として生きつづけている。
（市民文芸誌「どんとび」代表者）

阿部克行

（市民文芸誌「どんとび」代表者）

お大師さまのくれた緯管

文・絵 和田良譽

むかしむかし。旅によこれたお坊さんが、瀬戸内の海をながめながら里に来て、とある軒先きに立ち、しずかにお経を唱えはじめました。

すると、坐って機を織っていた娘さんが、お懐いっばいの変をすくって出て来て、托鉢に入ると、旅のお坊さんは会釈して、しずかに去って行きました。そこで、娘さんが機



前に座って織りはじめる、さきのお坊さんが戻って来て、「……じつは、すまんことじゃが、……その織り前の裂を少しばかり分けてもらおうことはできんじやろうか？」

「いいいます。このお坊さんは、織り前の裂を何にするのであろうか？」

「二奇特なことよ」と合掌して、その織り前の裂をしまうと、「この緯管をだいにしなさい」とお経を唱えながら西の方へ向かってとぼりとぼりと行きました。

とあやしみ、せつかく糸を組み合わせて織りはじめたものを、と思いましたが、もともと気のやさしい娘さんは、「へえ、かまんぞね」とおしげもなく、一尺あまりを切りとって、そのお坊さんにあげました。

お坊さんは、「ああ、あのお坊さんはお大師さんじゃったんじやなあ。織り前の裂をおあげしたお返しに、と いつまでもつづく緯管をおくれたの……緯管を開けてしまたけん」と手を合わせたということですが、

「二奇特なことよ」と合掌して、その織り前の裂をしまうと、「この緯管をだいにしなさい」とお経を唱えながら西の方へ向かってとぼりとぼりと行きました。

またその地方については、娘さんにあやかり、お大師さまのゆかりの札所をお参りする人々にたいしても、「おせつたい」をするようになったのだ、といわれています。
（弘法機）

注 緯管は緯糸を巻くもので、棒に入れて縦糸をくぐらせながら左右交互に動かしてゆくものです。